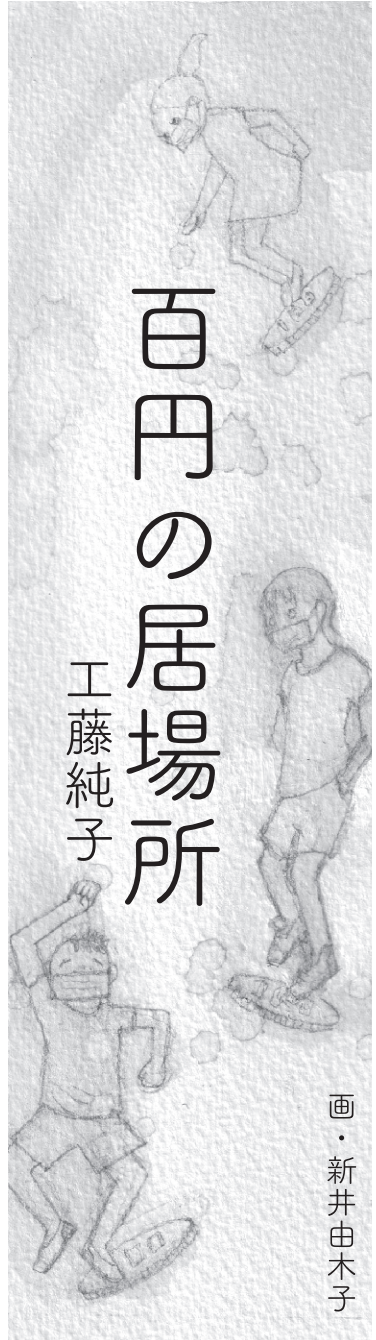


百円の居場所

工藤純子

画・新井由木子



オレは、ゲームのボタンを連打した。

「律、そうだ、いけいけっ」

マスクをつけている、優弥から、くぐもった声が聞こえてくる。

学校から帰って、すぐに集合して、ゲーム。何しろ、オレも優弥も「ヒマン」だから。

「それにしても、ここ、うるさくね？」

優弥が、迎りを見回した。

ガーコン、ガーコン、ガーコン。

「贅沢いなよ」

授業が終わると、すぐに学校を追い出される。児童館は閉鎖中だし、公園は暑い。

感染が心配だから「家に友だちを入れるな」っていわれ

ている。

世間をおびやかしているウイルスは、オレたちの生活にも、がっつりと食い込んでいた。

マジ、ウイルス、うぜえ。

「それにしても、律、よく思いついたよな。コインランドリーで遊ぼうだなんて」

優弥とは、六年になってから友だちになった。

それまでは、うるさくて、お調子者で、ちよっと乱暴なやつくらいにしか思ってたなかった。でも、話してみたら、案外おもしろいし、気が合う。好きなゲームも同じで、二学期になってからは、ほぼ毎日遊んでいる。

お互い、親が仕事で家にいないっていうのも、理由のひとつかもしれない。